Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-10-10

帝国を揺さぶる船「駒形丸事件」にみる移民管理の歴史社会学的考察

栢木，清吾

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2013-09-25
(Date of Publication)
2014-09-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第5977号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005977

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名　　栢 木 清 吾

専 攻　　人間文化科学専攻（文明動態論講座）

指導教員氏名　廳 茂

論文題目

帝国を揺さぶる船：「駒形丸事件」にみる移民管理の歴史社会学的考察

論文要旨

本研究は、1914 年に起こった「駒形丸事件」の歴史社会学的考察である。それは、大英帝国における移民管理が逆説的に生み出した帝国統治のほころびを、帝国臣民の移動の自由と制限がどのように場合分けされたかという経過を検証することによって、明らかにするものである。

「駒形丸事件」として知られる一連の出来事は、1914 年 3 月、シンガポールで事業を営むインドのパンジャーブ州出身の商人グルジット・シンが、カナダへの移住を志すインド人を、香港からヴァンクーヴァーまで輸送するため、日本の神栄汽船合資会社から一隻の汽船を傭船したことに端を発する 。この船の名が「駒形丸」である。4 月 4 日に 165 名のインド人を乗せて香港を出航した駒形丸は、ヴァンクーヴァーへ向かう途中、上海、門司、神戸、横浜でさらなる乗船者を募り、最終的に乗客は 376 名となっていた（ヒンドゥー教徒 12 名、イスラム教徒 24 名、シク教徒 340 名）。

5 月 23 日にヴァンクーヴァーに到着した駒形丸は、しかし、有色移民の移住を阻止しようとするカナダ内務省移民局によって、埠頭に接岸することすら許されず、陸から 1 キロ以上離れた沖合に投錨するよう命じられた。その後武装した警官隊を乗せた数隻の汽艇が昼夜を問わず船の周囲を巡回し、外部との連絡をほとんど遮断した。カナダ内務省移民局は、過去にカナダの居住権を取得していた 22 名には再入国を認めたが、グルジット・シンを含めた他のものには上陸を許可しなかった。ここから彼らの 2 ヶ月に及ぶ入管闘争が始まる。

移民局による厳密な医務監察と入管手続きの意図的な遅延、入国可否をめぐる裁判、政府からの退去勧告と、それに応じない乗客の抵抗。グルジット・シンらは移民官と幾度となく交渉を繰り返し、カナダ太平洋岸のインド人コミュニティは「海岸委員会（the Shore Committee）を設立し、陸上からさまざまな支援を行った。この上陸をめぐる争いは、汽艇で乗り付けた警察隊と乗客との武力衝突に発展し、最終的にはカナダ政府が海軍巡洋艦 HMCS レインボー号を出動させ、7 月 23 日に、駒形丸をインドへ向け強制的に出向させた。駒形丸の乗客たちによる抵抗は、軍事的威圧によって平定されたのである。

しかし、「事件」はそこで終わらない。同じ大英帝国の一員であるカナダによる駒形丸の「本国送還」が、インドにおける反英闘争の激化を招来する可能性を懸念したインド政庁は、9 月 25 日にカルカッタ近郊の港に上陸した駒形丸の乗客たちを捕縛するために警官隊と軍隊を派遣し、ほとんどの乗客たちの出身地であるパンジャーブ州へ特別列車で強制連行しようとした。そして、このような当局の措置に抵抗した乗客は、警察・軍隊と衝突し、少なくとも 26 名の死者と多数の重傷者を出すという結末を迎えたのである。

以上のように概観できる駒形丸事件は、これまでもさまざまな観点から歴史研究の関心を引いてきた。実際、本事件を主題にした実証的な歴史的モノグラフが、少なくとも 3 冊は上梓されている 。しかしながら、これまでのところ当事件に関する歴史的考察は、基本的にはインドとカナダの二カ国における国民史的記述の枠を出ることはなかったといえる。前者においては、ソーハン・シン・ジョッシュの『駒形丸の悲劇』（1975 年）に見られるように、本事件はインド独立運動の歴史的文脈のなかに位置づけられてきた 。カナダの排他的な移民政策に対して真っ向から異議を申し立てた駒形丸の乗客たちの活動は、反英独立闘争の口火を切るものだったと評価されてきたのである。インドにおいては、グルジッド・シン自身が晩年、国民会議派のナショナリズムに接近する過程で、駒形丸での航海を反植民地主義闘争の一齣であったと回顧的に再定義したことも一因となっている 。こうした見方は、在外インド人革命家や商人、移民労働者に関する歴史を収集し、彼らの独立運動への貢献を再評価しようという 1970 年代以降の研究動向に後押しされてきた 。

他方のカナダでは、現在のところ駒形丸事件に関する最も詳細な歴史学的モノグラフであるといえるヒュー・ジョンストンの『駒形丸の航海』（1979 年）に見られるように、「駒形丸事件」は過去の人種主義と移民排斥政策を典型的に示す出来事として記憶され、歴史的反省の対象として研究が進められてきた 。ここでの焦点は、駒形丸の入港を妨げた移民法に結晶化されたカナダの白人至上主義とアジア人差別の歴史を批判的に検討するとともに、カナダ史における南アジア系住民の貢献を顕彰することに置かれている。

筆者が駒形丸事件に初めて関心を抱き、本研究のテーマとして選んだそもそもの理由もここにあ

る。筆者は2005年当時、カナダの多文化主義政策をテーマに修士論文を執筆していたが、その資料収集過程で駒形丸事件に出会った。しかし、カナダという国民国家の内部での多文化主義の歴史を語る文脈ではこれほど有名な出来事が、例えば日本船籍の船が主人公であるにも関わらず日本ではほとんど知られていないということに、また、当時のカナダも駒形丸の乗船者たちの主な出身地であるインドも、ともに大英帝国の一部であったにもかかわらず、大英帝国史の反植民地主義運動の語りの中にもほとんど姿を見せないでいることに、大きな違和感を抱かざるをえなかった。

この違和感の理由の一つは、駒形丸に関する既存の歴史研究が、「インド」と「カナダ」というそれぞれのナショナルな歴史のなかで語られてからだと考えられる。前者においては、駒形丸の航海は、カナダでの人種差別的暴力に対峙した乗客たちが「インド人」として覚醒してゆく国民神話として読まれ、後者においては、多文化主義を国是とした「現在」のカナダ社会をより煌びやかに浮き立たせるための暗い過去として引き合いに出されてきた。

このような駒形丸事件のナショナルな歴史語りに対して、本研究はこの事件を、国民国家を超えて作用していた、大英帝国における移民管理に関わる統治にほころびをもたらすきっかけになった出来事として再考察するものである。そもそも駒形丸事件およびその事件に至るまでの20世紀初頭におけるインド人移民の移動は、「インド」と「カナダ」というナショナルな枠組みでは捉えきれないものだったのである。たとえば、グルジット・シン自身の経歴を追えばそれは明らかである。

インド北部に位置するパンジャーブ州の中心都市アムリットサルに生まれたグルジット・シンは、マラヤを拠点としてさまざまな事業を行い、一代で財を築いたシク教徒の商人であった。父親が兵士としてマラヤに駐屯した関係から、若い頃にマラヤに移り住んだグルジット・シンは、そこで門番から身を起こし、マラヤに駐屯するインド兵連隊に食糧供給の請負業や、鉱山開発や鉄道敷設事業、ゴム栽培農園に労働者を斡旋する人夫請負業で成功を納めた。中国語とマレー語を流暢に操り、マラヤとシンガポール、香港、パンジャーブを定期的に往来しながら事業を展開していた。このようにグルジット・シン自身が大英帝国の内部を移動しながら、それをいわば常態として、まさに帝国的なビジネス・キャリアを積んでいた。

海峡植民地をまたにかける一連のビジネスの延長として、インド人移民の輸送業に手を出そうとしていたグルジッド・シンだが、香港、シンガポール、カルカッタのあいだを飛びまわってもなかなか彼の要求に見合う船が見つからなかった。そんな折、ドイツ人の船舶仲介業者A. ブーネから、神栄汽船合資会社という日本の小さな汽船会社が所有船する駒形丸を紹介された。駒形丸はそれまで門司と香港のあいだで石炭を運搬する貨物船だったが、香港を基点として中国ー南洋間での「苦力」輸送に経済的可能性をみた神栄汽船は、駒形丸を貨客船に改造するため九龍のドックに繋留させていた。このように、駒形丸とグルジット・シンの出会いそのものが、大英帝国と、日本のようなその周縁を取り込む、トランスナショナルな舞台での出来事だったのである。

このような経緯で船を手に入れヴァンクーヴァーに向かったグルジット・シンをはじめ駒形丸の乗客たちの行動は、大英帝国における臣民としての地位と、それが保証しているはずの移動の権利を争点にしていた。「我々は英国の市民であり、帝国のいかなる場所をも訪れる権利がある」、駒形丸がカナダの海域内に入った際、グルジット・シンはカナダの移民官に対してそのように語った。そして彼の船に乗ったインド人がカナダ政府にいかに取り扱われるかによって、インド人が「我々が大英帝国の全土で平穏を保てるか否が決まる」とも述べた。ヴァンクーヴァーの波打ち際で行われた入管闘争に賭けられていたのは、400人近くのインド人移民のカナダへの上陸可否だけでなく、大英帝国を統合する原理自体だったのである。

本研究の構成は以下のとおりである。

第1章は、本研究全体が依拠する理論的枠組を練り上げることが目指される。ここではまず「駒形丸事件」に至る大英帝国内におけるインド移民の前史と、19世紀末から20世紀前半にかけての、大英帝国内におけるインド人、とくに20世紀初頭から始まるカナダへのインド人移民の渡航過程が成立する社会、経済、政治的背景が説明される。この歴史過程を追うことを通して、「駒形丸事件」前史と「事件」そのものを理解するための方法論的困難に取り組む。「駒形丸事件」を帝国と国民国家の二重性という点から理解するため、従来の移民研究が素朴な前提としてきた、「移民」を「出身国」と「受入国」という二項のあいだの往来という定点観測モデルに乗せて考察する傾向と、さらには移民というトランスナショナルな現象を把握するためにナショナルな領域や国民という範疇を前提とする「方法論的ナショナリズム」を批判的に検討し、本研究全体の理論的枠組を提示する。

第2章は、20世紀初頭から始まるインド人移民の渡航がカナダ社会でどのような反応を引き起こしたのかを概観した後、「英国臣民」であるインド人の移動を管理することが移民行政の当局者たちに困難な課題を提出していたことを指摘する。帝国領内の移動に対して、同じ帝国領の一部であるカナダが、どのような法制度を整備し、それを現場の移民審査官がどのように運用していったのかを具体的に追いかけながら、移民管理が場当たり的かつなし崩し的に出来上がっていったとの見取り図を描く。帝国領内の移民管理は、このような緩慢で複雑な道程を取りながら、なし崩し的に既成事実化されていた経緯を詳述する。

第3章は、ヴァンクーヴァーに到着した駒形丸に対するカナダ移民局の対応や、その乗客たちの送還の法的正当性が確定されたブリティッシュ・コロンビア州控訴裁判所における審議内容、そして駒形丸の送還が実施される際の具体的な状況を詳しく跡づける。駒形丸の乗客たちのカナダへの入国は、カナダ自治領は大英帝国の一部を構成してはいるが、移民管理においては絶対的な主権を有するという論理によって拒否された。本章では駒形丸をめぐる一連の出来事を細かく検証することを通して、駒形丸の乗客たちの移民管理がカナダの国家主権に内在する法的な権限であるとの

言説が正当化されていく過程には、法領域の外部における赤裸々な暴力が用いられていたことを明らかにする。

第４章では、「駒形丸事件」とインド独立運動とのかかわりについて考察する。駒形丸に乗ったインド人乗客がカナダから強制退去させられたという事実によって、北米太平洋岸地域を拠点に、武力革命によるインド独立を掲げて活動していた在外インド人の政治組織であるガダル党の活動が大きく勢いづいた。そして他方では、こうした反英運動の激化のために、カナダ政府やインド政庁などの施政者たちは、駒形丸の動向に警戒の眼を向けるようになる。ここでの課題は、インド政庁が作成した諸々の報告書や、関係各国に残された外交史料、そして 20 世紀初頭におけるインドの反植民地主義運動に関する記録文書などを読み解きながら、カナダへの上陸を拒否された後の駒形丸が、ガダル党の側からは「革命の船」として、植民地帝国側からは帝国の治安維持に悪影響をもたらす不穏分子として意味付けられていった過程を詳細に検討することである。

入国を求める多数のインド人を前にしてカナダ政府がとったなし崩し的対応、その法外な対応が裁判を経て法制度化されてしまう過程、そしてその結果革命の船として象徴化されざるをえなくなってしまう駒形丸の運命。終章では、帝国内の秩序を維持するために採られた一連の方策によって悲劇に追い込まれた一隻の船の運命が、実はその帝国の秩序自体を揺さぶり、脅かし、ほころびさせるきっかけになった顛末をまとめたうえで、移民管理に関する歴史社会学的アプローチに対する本研究の貢献と、残された今後の課題について整理し、さらなる研究の展望と見取り図を提示したい。

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　名	栢木　清吾		
論文題目	帝国を揺さぶる船 「駒形丸事件」にみる移民管理の歴史社会学的考察		
判　定	合　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	主　査	教授	廣　茂
	副　査	教授	野谷啓二
	副　査	教授	塚原東吾
	副　査	教授	小澤博毅
	副　査	明治学院大学准教授	石原　俊

要　旨

栢木清吾氏によって提出された論文は、１９１４年に起きたいわゆる「駒形丸事件」を歴史社会学的に考察したものである。駒形丸とは、インド人実業家グランジット・シンがカナダ移住を志す４００名近くのインド人をバンクーバーまで輸送するために雇い入れた日本の船である。バンクーバーに着いた駒形丸は、有色人種の移民を阻止しようとするカナダ内務省移民局によって埠頭に接岸することすら許されず、警官隊と乗客との武力衝突や裁判訴訟も含めた激しい入国をめぐる闘争ののち、当局によってついにインドに強制的に退去させられる。シンと乗客たちは、そのことで逆にインドにおける反英闘争の象徴となっていくが、インド帰国後事件のさらなる波及を懸念したインド政庁と乗客との間に武力衝突が起こり、多数の死傷者を出すという悲劇で終わる。

この事件をめぐる従来の研究は、インド側からはインド独立運動の歴史的文脈の観点から、反英独立闘争の口火を切る出来事の分析として、カナダ側からは現在のカナダの多文化主義政策の立場からの歴史的反省ならびに移民法に結晶化されることとなるカナダにおける白人至上主義とアジア人差別の批判的検討として遂行されてきた。

栢木氏は本論文において、このインド人の独立への覚醒の歴史物語論ならびにカナダ多文化主義の過去への批判的反省論といった、いずれにせよナショナルな観点にもとづく歴史像を相対化しようとする。それによっては移民のようなトランスナショナルな現象の意味が十分には捉えにくいからである。それにかわって、氏は、英帝国の主権というものに収まりきらなかった移民、船主、寄港地、そして公海、つまり移動という現象そのものに焦点を据え、「移民が国境を越えるから問題となるのではなく、移民を制限することによって国境なるものが立ちあがる」というトランスナショナルな動態的視点を立てることを提案する。この点が本論文の従来の研究に比してのもっともオリジナルな視点となっている。

第一章において本論文は、「方法的ナショナリズム」にとらわれがちであった従来の移民研究をのりこえて、トランスナショナルな移民論を用意するための歴史社会学的な理論枠組みを考察している。研究史の総括ならびに１９世紀末から２０世紀前半における英帝国下のインドの状態、インド人のカナダ移民の歴史、その移民の社会的背景等もここで分析されている。第二章、第三章においては、「英国臣民」として帝国内における対等の移動の自由の権利をもっていたはずのインド人移民に対し、カナダ移民行政当局が、いかに帝国の普遍的法ではなくカナダ自身のナショナルな国家主権の立場に依拠して対応をその都度模索していったかが豊富な資料をもとに叙述される。そしてカナダ当局によって、法という観念を越えた暴力がまさにナショナルな法の樹立のために最終的に行使されるにいたる経過が詳細に分析される。第四章では、この事件がインド独立の大義を掲げて活動していた在外インド人政治組織であるガダル党の反英活動を刺激するとともに、インドにおける広範な反英、独立運動を誘発していく過程が考察される。移民という現象が、ナショナルな論理の立ち上げに作用し、かつ帝国の存立そのものを揺るがせていく事情が細かく分析される。

論文審査においては、本論文における移民現象のトランスナショナルな視点の設定が高く評価された。同時に、インド及びイギリスで収集された数多くの史料が丹念に読み込まれ活用されていることも、本論文の特徴として特筆すべきものと判断された。欧米における「駒形丸事件」研究においては、ほとんどまったく配慮されてこなかった日本側の史料も使われていることも、本論文の重大な利点である。その意味で本論文は新しい「駒形丸事件」像を描きだそうとしたものであり、この事件の研究史に重要な貢献をなしたものと評価されうる。今後「移動と近代」とでも言うべきより大きな近代をめぐる歴史社会学的研究に繋がっていくことが見込まれる論文である。なお、氏は２本の公刊論文をすでに発表しており、総合人間科学研究科の学位授与の要件をみたしている。以上により審査委員会はこれを価値ある研究であると認め、学位申請者の栢木清吾は博士（学術）の学位を得る資格があると判断した。